

## 「サギやカワウのコロニーを観察しよう」

講師 唐沢孝一 進行 榎 聡

2026 年 4 月 25 日 JR 錦糸町駅南口 9 時 30 分集合

実施場所 横十間川親水公園 (東京都江東区)

毎年 4～7 月になると、横十間川親水公園の「野鳥の島」ではサギ類やカワウなどの集団繁殖でにぎわいます。岸边からわずか 10m たらずの至近距離で繁殖しており、その生態観察には絶好の場所です。

周辺はマンションや民家が密集した都市環境であり、人や自転車の往来も多いため大人数での観察会は不向きです。少人数で観察や撮影を行い、ポイントを絞って観察するには最適のフィールドです。

### ■ 牧場や工場のあった東京下町

「野鳥の島」のある東京下町は、明治以降の日本の近代化と共に変遷してきました。

明治～大正時代、JR 錦糸町駅周辺には歌人伊藤左千夫が経営する牧場が広がっていました(写真①)。都市化、工業化に伴い牧場は郊外の市川



や鎌ヶ谷へ移転。さらに郊外の都市化に追われるように房総半島へと移って残ったのがマザー牧場です。

戦後、下町は工業地帯として発展し高度経済成長を支えてきました。が、そのための地下水の過度のくみ上げにより地盤沈を招きました(最大で 4.5m 沈下)。親水公園の堤防をみると、地盤沈下に伴って嵩上(かさあげ)を繰り返してきた痕跡が残されています。(写真②)。川に架かる橋は周辺道路より一段と高いことから地盤沈下の歴史を実感することができます。

写真① 「伊藤左千夫牧舎兼住居跡」の看板(錦糸町駅前広場)

写真② 嵩上(かさあげ)を繰り返してきた堤防(石井秀夫氏撮影)

### ■ 運河から親水公園へ

江戸時代、物流を支えたのは水運であり、下町には運河や河川が縦横に張りめぐらされていました。

錦糸町駅から横十間親水公園へ都バスで四つ目通りを移動していく際、豎川、小名木川などに架かる橋を渡ります。豎川は、その名のように江戸城に向かって縦に掘られた(東西方



向の)運河であり、行徳の塩田でとれた塩を江戸に運ぶ役割がありました。一方、江戸城から見て横に(南北方向に)掘られ、幅が十間(約18m)あったのが横十間川でした。

江戸時代、武蔵国と下総国の国境(くにざかい)は隅田川でした。両国橋の名はこの二つの国に架かる橋を意味します。下町の開発にともない国境は隅田川から横十間川へ移り、現在は江戸川が東京と千葉の都県境です。

大正から昭和へ、時代と共に運輸の主流が水運から陸運(鉄道や自動車)へと変わりました。役割を終えた運河は埋め立てられ都民の憩いの場としての「親水公園」へと姿を変え、1986年には仙台堀川親水公園が誕生。横十間川

と仙台堀川が交差する付近に「野鳥の島」や「生物の楽園」などが造成されました(写真③)。

写真③ 水鳥が集団繁殖するようになった「野鳥の島」「生物の楽園」

#### ■野鳥の島を観察する。

現在、野鳥の島ではカワウ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、ゴイサギの5種類の水鳥が繁殖しています。都市環境の中にありながら、大型の水鳥が100巣以上も繁殖しているのは世界的に見てもとても珍しいことです。ここでの観察ポイント①は、水鳥たちにとって野鳥の島がどれほど繁殖に適しているかです。鳥の立場から考えてみたいと思います。

現地で気づくことは、水域で隔てられ天敵が近づきにくいこと、クスノキなどの大木や大小様々な樹木が植栽され、多様な営巣環境が用意されていることです(写真④)。また、大勢の人が行き交う都市環境は、野鳥の繁殖にプラスになっているのかもしれない。



写真④ 野鳥の島の環境(2026年、低木が伐採された後の5月16日に撮影)

写真⑤ 低木が伐採される前の野鳥の島(2024年5月11日撮影)

#### ■巣の地上からの高さ

表①は 2024 年 6 月 1 日に野鳥の島で調べた水鳥の巣の地上高とおもな営巣木を示したものです(唐沢 2024)。カワウはクスノキなどの高木の高所で優占し、高所～中所ではアオサギが、中所～低所ではダイサギやゴイサギ、低所ではコサギが優占する傾向が見られます。観察ポイント②は、水鳥の種類による営巣場所の空間的な棲み分けです。(注意 表①は 2024 年の調査結果であり、低木が伐採される前の環境は写真⑤のようでした)。

表① 野鳥の島におけるカワウ・サギ類の営巣木と巣の地上高

カワウ・サギ類の営巣木、地上高 (2024年6月1日) 唐沢孝一2024)					
	地上高			計	主な営巣木
	高	中	低		
カワウ	30			30	クスノキ、エノキ、タブノキなどの高木
アオサギ	12	18	10	40	高木から低木まで
ダイサギ		3	1	4	亜高木、低木
ゴイサギ		4	3	7	亜高木や低木 (密集した枝)
コサギ		3	93	96	密集した低木や竹の枝
	42	28	107	177	

■カワウとサギ類 4 種の観察

観察ポイント③は、サギ類の繁殖期独特の美しい婚姻色です。種ごとに目先や足などが独特の色彩に変化します。アオサギでは嘴や足が赤色に変化します(写真⑥)。ダイサギ(写真⑦)の目先は青く、コサギでは赤くなります(写真⑫)。ダイサギやコサギでは美しいレース状の蓑羽(みのばね)にも注目してください。



写真⑥⑦ アオサギ、ダイサギの婚姻色や蓑羽

■巣の材料、巣作り

観察ポイント④は、巣の構造と巣材の運搬などです。小鳥とちがって巣は大きく、巣材もはっきり見えます。どんな巣材を使っているのでしょうか。よく見ると、カワウの巣の中に



は針金のハンガーだけからなる巣もあります(元々はハシブトガラスが造った巣をカワウが利用しています)。

カワウやサギ類は、巣造りの時期だけでなく抱卵や育雛の時期にも巣材をはこび、巣の修理をします。クスノキなどの小枝を嘴で折るシーン、水面に落ちた小枝を巣に運ぶシーンなどが頻繁に観察できます(写真⑧)。

写真⑧ 水面に落ちたクスノキの小枝を巣に運ぶカワウ

#### ■ 求愛、交尾、卵、抱卵、雛への給餌など

観察ポイント⑤は求愛から交尾、抱卵、育雛などのあらゆる繁殖行動です。繁殖が始まる時期はカワウが早く、ダイサギやコサギはやや遅い傾向があります。しかし、同じ種でも時期がずれて次々と繁殖するため、一度に、同じ場所で、いろいろな繁殖ステージを観察することが可能です

巣の中の卵は見づらいですが、暴風雨などで落ちることもあり、また、孵化後の卵殻が落ちていることもよくあります(写真⑨⑩)。足元にも注意して探してみてください。



写真⑨ ミニ観察会の時にみつけたコサギの卵殻

写真⑩ 巣から落下したカワウの卵と卵殻。卵の表面は白色、内側は淡いブルー。卵のサイズは 58 mm × 37 mm。

育雛時の観察で注目したいのは大きく成長した雛への給餌シーンです。カワウやサギ類は、親鳥は捕らえた獲物をのみこみ、嗉囊(そのう)に入れて雛のいる巣に運びます。雛は翼を羽ばたかせ、親鳥の嘴をつつくなどの餌乞い(えごい)行動を行い、親鳥の口の中に頭を突っ込むなどして獲物を吐き出させて受け取ります(写真⑪)。

写真⑪ カワウの雛が親鳥の口の中に頭を差し込んで魚を受け取るシーン



### ■ タナボタ採餌

野鳥の島では、木の下をゴイサギやコサギ、ダイサギなどがうろついている行動をよく見かけます。実は、樹上から落ちてくる魚などを狙っているのです。落下してくる獲物を待ち構えて捕食する採餌を「タナボタ採餌」と命名しました。これが**観察ポイント⑥**です。

ラッキーなことに、ミニ観察会ではコサギによるタナボタ採餌を観察しました(写真⑫)。

写真⑫ タナボタ採餌でゲットしたコノシロを樹上でのみこもうとするコサギ(目先や足指の婚姻色にも注目)

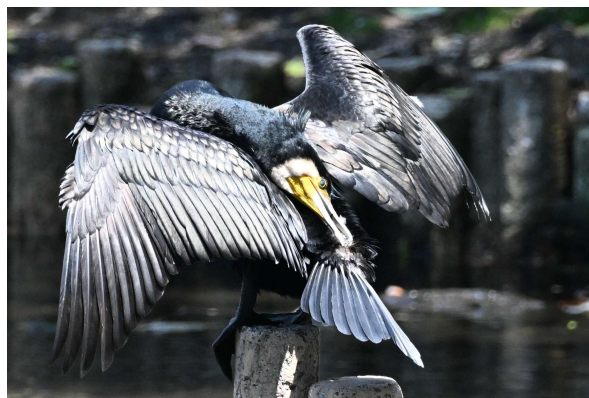


### ■ カワウの潜水と日光浴、尾脂腺

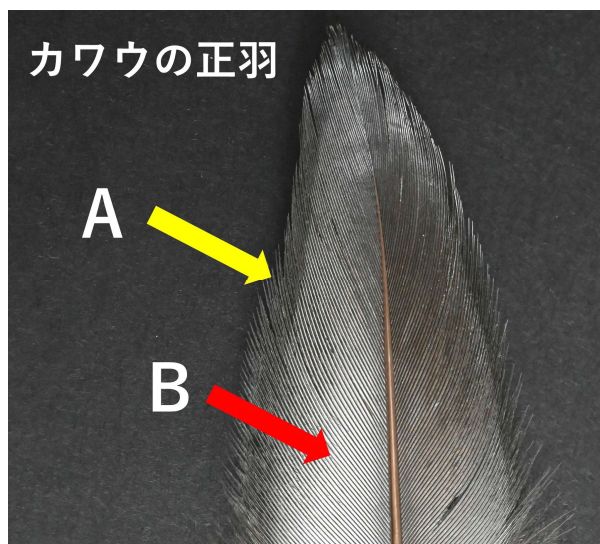
野鳥の島の周辺水域では、カワウが潜水をし、杭にとまって日光浴をするシーンをよくかけます。**観察ポイント⑦**は、水面に浮上した時のカワウの羽や日光浴時の尾脂腺(びしせん)です。

カワウの日光浴は、従来の説明では「カワウは尾脂腺が未発達のため羽に脂を塗らない。羽が濡れて体温が下がるので日光浴をする」といった説明がされてきました。ところが、カワウには尾脂腺があり、羽に脂を塗るため水を弾きます(写真⑬⑭)。

写真⑬ 尾脂腺から脂を取り出すカワウ(2026年5月5日撮影)



カワウの正羽は、羽弁の縁はほつれて水を含みやすく、羽弁の内側は小羽枝の密度が高く耐水性が高いという二重構造をしています(写真⑮)。潜水時には羽弁の縁は水を含まため潜水しやすく、しかも内部は濡れず保温性が保たれます(ソーア・ハンソン 2013)。



写真⑭ 浮上したカワウの羽は水を弾き水滴がころがる(矢印)

写真⑮ カワウの正羽の二重構造。羽弁の縁はほつれて水を吸い(写真 A)、内側(写真 B)は小羽枝の密度が高く保温性に優れている。

## ■コロニーの移動、野鳥の楽園から生物の楽園へ

「野鳥の島」ではカワウが増えすぎ、2024年ころより騒音や糞害が問題になりました。2025年には野鳥の島の低木や竹藪が伐採され、低木層で繁殖していたコサギやゴイサギの営巣場所が奪われ、50～60m南の「生物の楽園」へコロニーが移動しました。2026年にはカワウを除くダイサギ、アオサギ、ゴイサギなどが移動し新しいコロニーが形成されました。今後、「生物の楽園」でも営巣数が増えれば、新たな問題が生じる可能性があります。

### ■おまけの観察(1)

写真⑯はダイサギの嘴と頭骨の標本を用意してきました。これは唐沢家の家宝です。手にしてびっくりするのはその軽さです。軽さを体感してもらうため、片手に骨、もう一方の手に10円玉を乗せて比べてみます。2人の参加者に協力してもらいましたが、2人とも10円玉2個分の重さとほぼ同じか、もしくはそれよりやや軽いとのことでした(ちなみに10円玉1個は4.5gです)



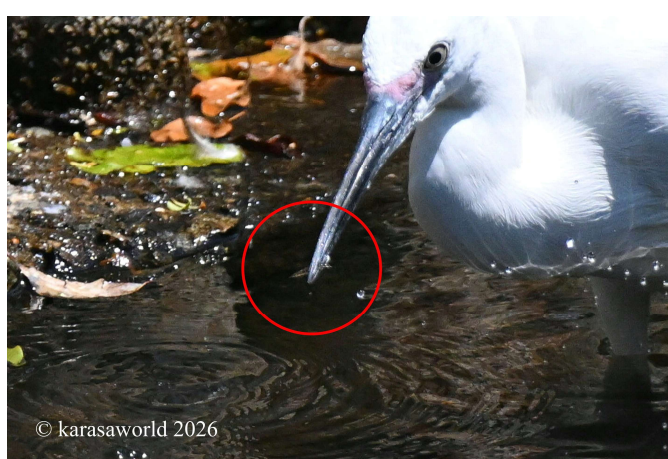
鳥類の骨格は中空で軽量です。また大きな嘴は爪や毛などと同じケラチン質であり、軽くてしなやか、丈夫であり、鳥類が空を飛翔する上でも極めて重要です。

写真⑯ダイサギの嘴と頭骨の標本。

### ■おまけの観察(2)

今回のミニ観察会を通してサギ類の食性に関して新しい発見がありました。

野鳥の島の岸辺でコサギが水面をつついて何かを食べていました。が、獲物が小さすぎ、しかもコサギの嘴の動きが速く何を食べているのかは不明でした。参加者の一人山部直喜氏がコサギのつついた水面を撮影し水中を泳ぐエビによく似た小動物の群れを発見しました。



送っていただいた画像(写真⑰)を調べたところ、小動物の正体はアミの仲間(エビ目とは異なるアミ目 Mysida に属す甲殻類)でした。観察会の後、何回か調査にでかけ、水面付近を遊泳するアミの大群を確認すると共にコサギやアオサギがアミを捕食するシーンを撮影することができました(写真⑱)。

写真⑰水面近くを浮遊するアミの大群(2026年4月25日 山部直喜氏撮影)

写真⑱アミを捕食するコサギ(円内はアミ、2026年5月8日撮影)

写真⑱野鳥の楽園をバックに記念写真(大野透氏撮影)



引用文献

- 唐沢孝一 1999 『江戸東京の自然を歩く』(中央公論新社):38-41  
ソーア・ハンソン 2013 『進化が生みだした自然の奇跡 羽』黒沢令子訳 白揚社:247-249  
唐沢孝一 2024 「東京とその周辺におけるアオサギとカワウのコロニー」Urban Bird  
Vol. 41:2-17